報聚集

帝國圖書館藏

ヘ 5
1906

雜談集

一伏見より長崎へ行くに芭蕉翁の名句いまだ
忘れがたく思ひ出られ侍りの旅姿を
大津尚白亭にて
辛崎の松は花より勝れけり
一句の中に尾言外の味
あるべし人も見るべき事なり

仕うまつるべきなり中古
の頽(ケサク)倦なりて是非の境を本意とし
ほれ人さしもて其句徒に誹諧の
骨髄にあらずもはなる切字たりまでて
名人の格的のいとさまの姿をも変句
とゆゆしやと不審(シン)しける 巻中
哉とまりの変句は あてとまりの音を
を結びてもてはやされぬ
とゆゆしなるを句を句なりてかくる

中

ことにあらずもてはやされて
外ならもを徹(テツシ)しらぬ子の作る句
中の句他の的当なりとも論を再(ニ)
為るべき迷はれ一句の問答を経てもて
あり但し予の方寸上よりの形
いと作法のまの入れ物なりて
初の言根のもとをみるべ 只眼を
なるべきもてはやされ
一本形に命入る宗盗(シウトウカイ)は生涯をかろんず

隱岐の山崎の桑の門もとを車馬の
喧(カシヒ)なく日ぐしい近衛殿　宇治へ道(セウ)
遥(ヨウ)の山ぢ所もとめるまのことを人々
りの痩(マセ)ツカレ者は所ぢ庵菓元
なくてものほの心のこえよりかるを
みるこころを
宗祇ひるをみやがらるる
とゆるしれ則
のちのんかれを夏の沢水

とつくもうるとけるる事を與ありけるやや
元改上人の隱(イレイツ)岐ぢ宗鑑の侍を人ぢ
へるを此ワキ元(ホレノ)侍よくるるを心ありと
てのぞれ作るを也一句一生の法を無(ナニ)
けるを所ぢ物なれる畫寢(ケウシン)
りもあるの人ぢ思(ヒ)
ゆるしへるを所ぢ山崎の家庵を
ものを古(クツ)哲とは侍衣をのこしてけるよ
り所を去れ侍るを山の天狗や

成て九余年の月日のあらしにおなじ
八幡山傍のあらしをはやみひさかたの人の
色てこそまつの木陰に涼(シラケ)まもるて
角(カド)あらしく人をはらはしとのみなりはて
しかくれたるもとをしたひ正み
てくらしとらみ人まれく多し
一貞享乙丑年九月十四日の夜の夢に露
世にあらてはなとあはれてこの夕ひら包
首にかけ菅笠を冠りて旅の下

旅にしてびの杖をたよりあけひまく沖のうら
きをうりけるあまをとこ海鼠(ハイテン)の声
つくられを社人(立さとるとて)蔀(シトミ)さしか
ゝれたる新たもむさう屏風といふものを
見てこそ見るかのをけるうばはしらとも
あるものの信にけりさる面もの多くる
さ屋を社人なるてとくあるを先
なくる時みるてのくるふ一句つくるま
はたそゆくはとつゝむくあそれ

[illegible]とゆあそび流よ面白く海
[illegible]松の葉末の色井の底
[illegible]

松原のすきまを[illegible]と
[illegible]社人[illegible]ある新よし此し
[illegible]
[illegible]
十五日の新原川の八幡宮へ詣る

[illegible]芭蕉庵を[illegible]
[illegible]現[illegible]
[illegible]
[illegible]魂の遊
一荷分集[illegible]
散花を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

守武

一先年上京の時挑灯　李吟

目をあやまれる花もほれら庭れと
なんどいつもみくもを(ツウイン)音の句く

一五十句百句とけるを幸北野焚灯より始ム

一西岸寺任口上人のくんさく二牧

菓はしく刈るも若のあ花姫ア
蓼醋ともちゆ原をこそるけん哉

伏見くもも元行るその京へ出るもて
稲荷山ふもろもろがれを乃す

うるは前ふらもあいやとてわるもく男
はてとくらもせるを祈へのひろひて
花のまれ藪根埴ふるみてもり海ア
ひろくさうもうもうもうもうもうて神を色
ゆうまれ短尺の(デウシ)紙の上ま男山正八幡
大菩薩と仇書せ所ちもうもうも
内をもんけるもやが(ウ)埴ア色をみて
拾うん只神名のうくしうれるも
振けくあんもわもく

一さみだれあるの比勢田のてはしの名たかくあらはれて矢矧
のはしともいふ（きこゆ）長橋の天下かくる
物多一橋をかけ人ゝと雖ども
京大津より此の所に行る中去来ゝ
此のあたりさりとさりとも面白
云へる面白き所湖鏡一面あるりて水
接天とよみし八景を亡せしかゝ一
橋を見付る時と云所といひ一句あ

ゝ景物のうつりかはる場をいてゝ
面白き文章のみものあづかれと云へる
聲者（コヤ）のうつりかはへし
一面小西行脚のうつりかはしなの三句を
みてもいつれとやよかれ中
付て姨ひとり泣月の夜　芭
いかゝ句をこの所に定らるとやとれど強
ゝ一句人目あるゝ伏はよも其
夜の月の天心にいるゝ人の去るを

少なりと怪ひのうれうるに友吉う
さしし所の月は四角なるうう
とうるい為さ世に自ら作り
給ふるけるも新月さみれ中
うれあ物ひうてみるべくさや
一ううるの猿子立かてもたおひ合
るる川は寒しみるなくしは今宵
暑るも寒しといは俊成の雑談し
出ずや一疋なりけを蟬の事 自悦

一あるを桃のけしまよ人心うつろひ安住
も覚つる形しと上地の樹みまはり
さ門主例なるは付なしさをを山の氣
色いを閑なるうももうれるるやを
ううん蔵の底をあやうを中を丸春
定ざ色日はまうるうるいるづまなを世
ホよりもいるを心づひをうを真なく
うへ見へあまあるく風主の私まひを生
大師の御庭はるるを呂春

[illegible]の縁[illegible]年[illegible]の[illegible]に[illegible]
蓋の[illegible]方の種[illegible]行[illegible]
[illegible]

[illegible]て[illegible]
入れ[illegible]しほ[illegible]門を鷺洲(カウキヨ)のよ[illegible]を
[illegible]て鳴物[illegible]
[illegible]日[illegible]世[illegible]
[illegible]佛身非情(ヒセウ)草木[illegible]
[illegible]でのみ[illegible]と愁眉(シウビ)[illegible]

角

一[illegible]二月[illegible]山[illegible]

角

[illegible]
[illegible]山[illegible]又[illegible]
[illegible]山[illegible]

角

[illegible]
香奠(カウデン)[illegible]系図[illegible]

普船

[illegible]一日[illegible]

挙白

[illegible]

浮萍

[illegible]

[illegible]投[illegible]

亀翁

[illegible]

水花

嵐蘭の母と田中宗支とは二人の孫にて
その宗支の武功をよく知りかれり
和加尋田の田文まことに中なるよし
松倉豊後守の老臣なり伝へられど
孫子伝へて河内なる土八重の上に
ひとれ田の畦に死べしとこれを家訓
として四つに切て懐旧 嵐蘭

死て名 秋 梅 小田の雲

一加賀金沢の一矢八郎なる者也

あり脚の疵に宿りて遠く心を
をこびをそれを事みて重労に成
ぬれと今のをこりにもかりにて又
の千三回のあるにて京の郷俗を十三歳
孝養をして思ひ立ちて八島
をさぶらひ呼部のみちを越て
を身いとなんなる氣ひとなく死
も悔なくして五条の宿にあれば
筆を休めなをしひ呼て

[illegible]八尾[illegible]
[illegible]我肌[illegible]
[illegible]
心[illegible]雪[illegible]
[illegible]正念[illegible]翠年[illegible]
の白根[illegible]松[illegible]
[illegible]哀[illegible]
塚[illegible]我[illegible]
常住の蓮[illegible]

翁

何[illegible]

我[illegible]
月[illegible]魂[illegible]
つ[illegible]
[illegible]堂鳥跡[illegible]
[illegible]
[illegible]所[illegible]
[illegible]の席[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の石佛[illegible]列

牧童

[illegible]雲口

[illegible]遊女[illegible]

それをもつて
あつまりあつまりやあらん風の森なるとう
りの池平家を投げるのほとりに
茶碗ていさく
とあるこうし茶碗の事書の跡鳥跡
七十七ものあるくしやうをとげ
ちかい一向の海いやしたゝ入泉より出れ
ばうちかたきうたをあらせけるも
讃佛祭の因なりとゝ

一山川といふ世弥七郎ほうなめれもいまだ新
ちなる見合せあつて志他なくこれ二癖なくして
それを乃ちの反故も拾ひ集めてこれを物引
彼元つみといふ集ハやうにて清書なるしむ又
俗和ようひくりしなりもいつぐなと同ちくセハ古
詩古ちの孫なれ叶へるも筆ちあるよりおろる具
力色孫て兵業ちくんげあらといふて勤めて困ず
それらつとめり氣宿ともいかるうとてわれや
の文緒いるもしひらとといへる同ちく志あり

風をいつもうけたる　君の門　山川
水鏡くぐる　紀州乃樂　角
傘をうりて西をあるく　溪石
玉　所色色　萩うゑ　山川
俤俤の肩ふみかくる　ほうみ月　色
うるはしの　せてをを　孤うらく　仝
一筋の形見といふる重高のうちに　裏東つ
くるひて鏡の間　ひむ　なる
物ゆ　似ぬ姿なるもことわり　宝生　沾蓬

一家を費るかもち　盛（セイ）の盛（シヤウ）の至誠（シヤウ）を
よりて買物いく　かの　八月雅　とて
人　ゆるしたれど白炭　ゆ　忠知
義　あるふ　勇の　新法師　と
辞世　腹切　ける　ふ　せ　る　侍世
ゆ　ん　義　う　の　法　ゆ　く　忠知　ゆ
や　ら　へ　も　物（ブシ）　み　見　ゆ　ゆ　十年
来　ゆ　腹　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
元　ゆ　何　ゆ　と　へ　ん　ゆ　ゆ　多　忠知

双六な世のさいめんやあの月むしおと
ゆうもうと申しき協句ハ世にハ何のことと
ゐんとおもひ定めし死活の境未来記之
本意を称めくといふしなり　春澄
皆人を当を失しやといはれ侍り　同
世自暴自棄の句をおもひて立つる句も放散
しくの句かやすくて朽廃するはいかに
松の代ちり正木のかつらながくたれ
撰にかなひける桃青の罪人とやいはん

そちらの流をもいはゞ名利のかくれなき名
利の境に落る信れども身にもこの名のとほる
につけても桃青の信をとこそはべれ
一閑見月
名月や雲の上なる雲の影　角
またこの人ぞしつめてみる月に
おもしろくされる松江の意
難同花影乗月上欄干此句に思ひ合する
時は雲の上の松影なる時なのは夏の
夜の涼しさ狮子もかのかくる　答て素月
すゞしくも欄干にのぼるとなり

いかるとく松の黒さの月あらふ　甫

光廣へてこの月は嵐よ庭まあ心をよのませ

はるかに明もよみごとくあとも春月の本

色八幡くとうしるべ辨うよきと行道

於大津　義仲庵

三井寺の門もとうとやけの月　翁

其姿色思ひ合ふるも名月よ翁月

をみるかりひかもなく物くの口質よ切字さ

へへ多分色給うとうしるもあさ明

名月や琴のいかりのあふ波取　洒落

竜舟のはりあふ月尺ず　仙化

月は私ないさお合へ屋の影　亀翁

海ちく雲軍中もひてこの月　普船

名月を是のうしみる平沢　未陌

その月　塚　あるる執筆　遠水

一行者仁者の山の楽　心のつるとろ

とうの道元　花の芳野山とこ

光の月　井　みの　焼の色　の雲　貞室

いさの淵も嘆瀬の鮎くらのよ鮎る　同

墨田川はこ百こ〜なこ琴巴を員

枕をうえて角を伏をしつつ寶も

深〜ふかしら短尺を買うも未

鶯の嬢ともしを鶯ゆ鶯

高山廉塘　形拙の詩まて

倩錢の淵ちうつまね氷のれ　真室

かこ年ちをみ拙ちをしをうを

拙すサセら

いろ形ちまちんいら真ちり

一鉄炮と云名の物ゆ物を句仰ゆ物をして強

おの白ま付分ゆて案ゆる大巓和尚の百

影猿さ　人間肇負悲猿境　辛苦管中多涙

と仰ゆ物ら是八伊豆の山まて猟師の猿をみ

つけて鉄炮を元上ゆる西猿猟腸乃色を

出て呼ひらを即真の詩なをし作を

ら辛苦管とのへを則鉄炮とをゆる西

御ゆて公ゆ自由ゆ物ゆ物ゆ公ゆ品を

作を又りハ鉄炮と云名の面白ゆ物で是成

十七字のうちあてゝひゞきとて　初懐帋
餅作るならの廣葉をうち合セ　と
これほどの句作なれども鉄炮と云て手のまゝ作
りを好みしくやされど句ほど作りよくて捌(サバケ)
よくもなりのハなし定家卿の詠花桜など云
ほどの句もありくる傳也
一いせの蛍の貝ありしハ色の子が舟にのせてお
ところうせて出るしきてうつむきて泪金
ぬすむその子も乳をさして泣声(コヱ)の底にゆ

抱くる手やがてうみてかゝる息(イキ)もゆれあへす艀(フナバシ)
その乳をとりて乳房(フサ)さし入てさぐりみる此哥
猿まで仁心の發動(ハツドウ)せる所なれども一句に
云てはてのなきことを両の新法を取り
これ又為法云々
　うまく艸をつみて抱くるなりと云中
　蛍の子なれど舟に乳をのむ　と付
これも三才圖彙(ヅイ)の絵をとみるゆゑうみてきたれる
一句の感賞なくも吟をたゆまず乱りに付る句ハ拙也

時の道まさしうひぬ色しるし尾張は
えさらう陸さびのかれるのてとうなを
付合せられられて撰国に宮のいまぶ造景(サウエイ)あり
つ[illegible]まし[illegible]人うの心も弥さびる新のみ
ゑのひて皆郡賢の眼(マナコ)を付ハ[illegible]の目とて
五子伝まてひぐらきけり
伊勢まゐのてうに年遷宮(ウツリ)良材とも海て
大工達の人てしを新の神の社　角
次のとし[illegible]

[illegible]
郡陽より新吉のさいふうとしいそで情(ジヤウ)のうきを
なのつゝ見あきもいかるとうの也又情の
厚(アツ)きを心をもたれも作者の筋より思ひ
合あるひ人はまを新しく不易(フエキ)の功あるとれ
ゝ位の人の九ものひとをあるを少年の女
新女撰つかぶの打のみ[illegible]るの新を学ぶ心
とのもひもの[illegible]新あるも学ぶ[illegible]
なをまゐ[illegible]者てゆといとゝ心やしと嵐雪

[illegible]

なんもまま揚梅の實　むつ口　梅翁

四十ちゑ[illegible]の[illegible]のいそうや　嵐蘭

年寄も[illegible]ぬりの[illegible]暮　東順

戒在り色といふ[illegible]をよみ[illegible]

錦木や色のをりの老男　是吉

力なや麻刈あとのなきれ風　越人

惜ふ師走の菊の歌　うめ　露沾

老の身の涙[illegible]　岩翁

紙ゑ[illegible]　[illegible]

去比[illegible]

百夜[illegible]　雪のみる　[illegible]

[illegible]恋の字[illegible]　[illegible]

[illegible]猿蓑の[illegible]

[illegible]

うゑ世の[illegible]皆小町[illegible]

白[illegible]

日この愛よりはのるの人情よりてたちを
為の衰病(スイヒヤウ)まつたくなり 嬉男よりあるべる秘
を祈てうれしかるべるとあるハ三ヶ血氣ヤ
合めはたるのみもはしくはの行るを此
口癖(クチグセ)いろは愈(イヤ)ぬくよ
一ぬるとはるとのかるハらるてあるべること

尊紙を扇にしてサうれ 信德
見ハ盃ほりあるうなどるるはるとはるとは合
のるをなるを所とりへるる書(ミシヒ)なるる

ほ舟やみなりうくほく芦のそれ 鳥翁
うれを吹るはまは合のるなるを一るは優(ユウ)あり此
ぬるはあるをしは芦るうれはを幾代舟ユ支
るるるは響(ヒキ)あり 執向まうはるるうすて
ぬるぬるはるぬるはるるるるるるる思ひあ多一此
此信風うみは此るなるハ例のぬるるるるて一
るもえやうはと早ヤなるるは

名月をそ霄(ムヘ)ほくるもちん 德
いるるひのそをあるるの世世とはるる祝念う見ハ

今年就中勝(ハシタ)れ先御(ツタフ)と白氏の事を思ひ出る
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
陰の字成怨(イカル)と訓(クン)せ一氣のたゝひ成
夜 九月[illegible]七夕 翁
[illegible]嵐[illegible]れん 角

且 [illegible]仙化
[illegible] 角
昼 晴[illegible]晴 昼下り 蕭山
白雨の日[illegible] 揚水
暮 [illegible]羽[illegible]長(オトナ)[illegible]日暮か 亀翁
日[illegible]設(イル)[illegible]梅の木曲(アリ)か 柏舟
[illegible]
[illegible]思(ヒ)[illegible] [illegible]
[illegible]鳥心の動(トウ)静(セイ)[illegible]

の機転をはなるまじき也此比の当座に

小男鹿やほそき声なり也流　角

と申ける都のし百里の旅をかけ出しに木曽

路の秋を深く思ふも面白き風情にて八面白き也

又しなの山に分入り桟の水音をも耳に残して

思ひなるといはれて世をわたるとき事を歎き也

出でて景を合せてた情負けにて情をくるしして梅

景を尋ねて此夜の旅路を思ひ富士をながめては

発句のちいさく成ぬるは心の及ばざる故なし

一発句付句ともに句の主をなすに極めるべきこと

歳扇子と名をはるやうにて作者の名をことに求め

扇とも一つの亭を立されて其名其名を定むべし只

持扇の如くに名を付けて作句のみを

まづそれ様に心をなして侍るべき事ありていはば句に

て其道ある人ばかり思ひとり上手なし

大かたの月をもち出し　七十二　西岸寺　任口

まかりて発句作にて主の好んで立さしくば伊丹の

宗旦帳みるやうにて其のつかし貞徳の志なし

うゑの歩み作の格好をみる為し　荷分
作よ学るを元合せてと楽〳〵バ古歌迄てのまま
きしりく出て毎句よハ云とられおもくやまず
初春の藪のうゝよりれを学るかとも氣を付るを不
ア〳〵よ作意みくゝれも又氣迄をけづしおて反
つゝ見を求めて新しなぐ〳〵ものゝ己レ合点
〳〵りと人の吟ゝるもきき句吟て定れて乃
高ハ吟ハくゝう稀ゝなるもしハ恐迄多し
一自性といふ部ゝ

安心の作ゝ　嫌ハ〳〵迄　枯風
或作難ゝ云安心の上ゝ悲ゝ哀ゝ発れ
のゝれといふく可叶と。句ゝ。やハ休め字ゝ多
過ゝと云る句ゝ物我（モツカ）のゝ〳〵ゝ天地一己の
自性を云ル句ゝ花ハ月雪ゝ〳〵ゝ国のゝ〳〵り
既姿の句ゝ迄て下部ゝ〳〵ゝ句ゝ作ゝ〳〵ゝ作の
句ゝ部作の見いゝ〳〵ゝ句ゝ〳〵ゝ迷（メイ）
悟ゝ理ハ句ゝ〳〵ゝ僧団口
一なゝ人福ゝ乃ゝ〳〵ゝ七人ゝ句を見

中ノ大黒殿をいとあはれと拝ひて送り出る

多武峯桜の口ぬく　小槌なる　角

一九月三日の晩巴山りそなる衆徒懐ふ（ふトコロ）を御ふ

川つ辺て松をくいはる　角り形　仝

一日比落葉の歌のくさ当座合　法徳判

艸　桔梗　ちるくも　おちかゝり　兎角

庭もの卯（カイ）ゝみ　落葉　角

雑をもあはれとあやしく持ふ　ふる雨

合せて穿（セン）　ふる時よく叶へ　ふるの雑を

ふるゝ弱とゝ　ふるゝ白かゝ　宮ゝ　白かゝと　紙向と

狂へる所ゝ　弓ゝ　赤練ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

鳴ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　全雑の形容ゝ　庫な

ゝ向なる　木兎（ツク）　ゝ　ゝ　子英

茶ゝ　ゝ　蚤（ホシロ）眉　ゝ　ゝ　柴雫（イセ）

鵙　ゝ　ゝ　ゝ　抽ゝ　ゝ　野水（尾カハ）

一ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　秋ゝ

付合ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　紀（キカウ）ゝ

[illegible] 指[illegible] 肅山
[illegible] 自然の高[illegible]
[illegible] 至 和 梅翁
[illegible] 念の[illegible]
石菖の[illegible] 用
雲[illegible] 仰て[illegible]の四章[illegible] 幸水
[illegible] 自然の菊の[illegible]
自然の碁石[illegible] 菊の[illegible] 用
[illegible]と[illegible]

一今の部諸の正風[illegible]心の上より功を
かけ[illegible]何[illegible]も一句[illegible]
是[illegible]
只句[illegible]行形[illegible]
論[illegible]
[illegible]
人の音[illegible]
[illegible]
重形立圓 宗因一句[illegible]

時代(ニヤ)蒔絵の型地あるも秘蔵せる又音とも
下地(ソカリ)無れば念の入ざるハ元(ハケ)すり漆(ウル)しなり今
何の用ゐるべき道具の仕者はなるべしなり
念を入て(コシラヘ)楽せし千歳の後も至宝(シホウ)と時の用
ゐるべんなり扨向をあるべきはかなり
うち紙せは合(セ)ぬ合ぬ型をもを
さへとばこ思ふ人と元やすきうすも金紙せ
彩(イロト)り筆を以て紙の色をかちけるを束
ねて方寸の器(ウツハ)ものも至(キ)大事なるべし

一名翁父子ともに大山接島よりのぞきぬ
心ゝ見ともなく人をたゝしれ秋の氣
色なもよのほきれて雁の安つもるれ親子
きのう一つ色りてくるるとの賜ひを
真ありがたき志ぐしのうるもしの島
さ浅俺ぬ人よやと藤びくれる旅と
度ゝゝゝゝもるれ鈴森て
夜ゝのうゝ日数りるよ六日なんも数
きのとの毎ゝ風系ひとりて尚(カナ)も

はぐしを立てるもみぢの今しも

品川

氣晴々しく品川海の夕月 キ百

入舟も出船も霞る水の面 月ゆ

品川も連なりて鳳の聲 其角

向島

初草や藤まつ宿綾キ 月水

かすみつゝ痩を元隆燈の色 尺州

程谷

ほとゝぎす夕月やどる小夜の山 亀翁

戸塚

稲塚のとつゝく田守小 元角

藤沢

宿とりて東西とゝの芋の月 仝

遊行寺

村のこれ鳥牛宿小林小 キ百

遊行寺世の粧相蓮華 天中

田村川

立ち二度ある新の月 岩翁

追落し鮎のよるみや石の音　横几

市子

[illegible]　きね

立杭の節や[illegible]　岩翁

伊勢原

吹稲田の縄はるや本通り　遠水

横手やたなれての蕎麥畑　子角

御向会

[illegible]　岩翁

柿賣やおもひ松の下やすり　亀雨

生栗を握りつかる山路か　其角

大山

麻やせて餅に犬の毛並か　素水

勝押やうるる岩根のとまり　子角

石蔵　山義　玉石千樂洞　門遠　死川一掌庵

[illegible]　亀雨

呑水もあるかの沢山か　旦水

[illegible]　子角

[illegible]

二開茶屋

[illegible]　亀石

白雪の尾髪はらるすきかな　き角

[illegible]

相撲とる力士はうしろ姿陽炎　亀石

嫁のうる月を酒とる砂鶏　未陌

七星濱

新酒くむ少女ちらしの上　亀石

由井濱

名月や海色法師の頭菖　岩翁

新方丁一の華表や陸の音　き角

雪の下やうるる

うら寒し風呂を焼かる星の蜜　亀翁

水うつ宿の庭子や茶の行仕　き角

二つ子の場ふ所や多式の飛の石　岩翁

旗の炊行逆竹や磯の声　横几

[illegible]岡　奉納

其幹や張香うしみ千枝の紅　亀翁
葉紅葉山の日ぬくし　尺巾

松岡

比丘尼所の竹垣を囲る紅の花　千蕉
うしよ定めぬ小あれみて
紅の子ら柘榴こぼして勝れ上　岩翁

離山みくる程
りんも刈田乃稲の手刈り　仝
稲塚よ言ひちらすなの下　横几

月次俳諧文庫見用記也

平月や去まつのなりぬ　臺所　松風
あるるや歩みもゆるまもなりぬ　岩翁
あさつまもつよ清よ白根うの　同
楽人やいつまてうしく春の孔　遠水
摘うしうもうるるひまなく根芹ぬ　亀翁
亦うるや一立の梅のんめれ　荷兮
掬のまてせてハ刺む芹苦ぬ　如春
手ぬるひよ雪間の雉のうしぬ　撒士

白魚や漁翁う酒ゑ[illegible]ひ[illegible]　東吹

青海苔や[illegible]ほよはち[illegible]磯別れ　尺艸

[illegible]よ姿[illegible]なし　指柳　春水

出[illegible]ハ[illegible]通り名付る　女うな　岩翁

[illegible]　[illegible]　[illegible]　鉄枝

[illegible]の晩を[illegible]せ[illegible]る　曲水

[illegible]すよ[illegible]　蕎　其角

[illegible]子[illegible]き[illegible]　東ゆる　華[illegible]る　[illegible]

木面を[illegible]く[illegible]の[illegible]　遠水

[illegible]や[illegible]子[illegible]

尋[illegible]　二句　金屏風　青船

[illegible]木[illegible]の亭を[illegible]花いま[illegible]　其角

よ[illegible]大[illegible]代[illegible]の[illegible]り　揚水

[illegible]や　苗代[illegible]　仙化

一[illegible]　[illegible]　麥[illegible]　春水

星[illegible]日の[illegible]花[illegible]　横儿

山[illegible]白[illegible]　仙化

[illegible]山[illegible]門[illegible]　枳風

ゆく大や むくひちる 糸さくら 尺艸
やはらを花見のつゝみ お撲さり 嵐蘭
遅き人の手つゝ遅桜 山川
紙屑や 所くるみ おそはるゝ(いせ) 紫車
車ゝ花見を乗たゝ東山 キ角
多賀の師を車庭や花の児 嵐雪
我目ゆゝあつゝ山の桜哉(いせ) 翠柚
出るゝの間やかなゝの手の時 游萍

なつの紙

いつゝゝ 袷ゝ着る人の成 露沾
汐をなで〳〵涼さうなる衣く 且水
不斷着ゝ着ゝ故もよや 衣更 キ角
引さけゝ思へ車ゝこゝもく 横儿
此雨ゝどゝゝゝゝゝ(イセ) 翠柚
燭 花 こけるゝ 仙化
六阿陀ゝけゝ 角 キ角
上り場をゝ祭や 角田川 キ角

青麦の穂にて昼なる鶏の声　治德

青梅やをのゝ空（ウツホ）よ雲ゐて　岩泉

なりぬ鳥のなくなる夜の戸　普船

ちらしつゝ是もゆ（ソルー）を西ゆく人　キ角

さうゝゝしやむすひ分ゝり　縄簑　キ角

洒落堂　額破

なりぬ雨やを紙へぎるなの花　翁

箱根路を越てゝ　・

裏へ人を廿貫目乃あつさ哉　柴雫

くゝり二心ゆ涼み来　房治

此松をゝ風ゆり夏涼ゝ　キ角

ゆ日を転寝ゆ暑さ哉　蓬仙（いせ）

白雨やゝの黒ゝ弱のつゝ　普船

ゆゝゝ日ゆ遣ゝ曇哉　楊水

帷子ゆ力やゝ女むき　岩翁

気ゆ舟ゝ入ゝ夏ゝ　ゆ

行進ゝ祭ゆゝ牛の足　幽也

番付をうゝ糸のきほ分　キ角

たちまちに八幡下の茶の水なる　角亭　亀翁
伏屋や夏付替し　雨あがり　雅童
石垣や　ちらひ入て　淵の鄭　去来

秋紙

搗られる烏帽子いつまでかくれ　斗角
笠合すかるよく祝の目利かな　是吉
四井戸のあるよりひろり　炊鰹　普船
いなつるや国の稔を物うれ　少花

霊棚のうけめを運ひ　紀
葬や人を洞く金ものの番　其由
鬼灯やうつくしさの口の中　三劔　青楓
唐紅の壺の中なる小松かな　伊萍
ちるもをしりしる花ぶりの　探泉
祝うつるまつ　尤利　さの　幸水
憐坊のほくろ胸の赤ニ　京　史邦
けつ雁やうつ水元筑波山　青楓
名月や祝ひ起ル森の鳴　ぜ　弥頑

名月や芋もげるなる岩の穴　巴山
弱音を人逢坂よりハ行義なり　正秀

本ゑ[illegible]
あこやの千出て

めぐりやゝ山を離れて星の秋　百里
みのさぬハ[illegible]田もゝあ栗山おろし　全峯
岩穂とゑはけてその白餐ふ　樂宇

貝ぬぐの紅さうて

赤貝ゑとるなる庭のまり哉　揚水
渋柿ゑ[illegible]ゑ[illegible]深し殺ふ　兎株

[illegible]ふけるるの[illegible]　全峯
[illegible]耳のうしろ朽る月陰ふ　佑蓬

毛子

[illegible]菊の四つ身ゑ[illegible]小秋ふ　溪石
[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]　幽霄
氣をつけて[illegible]秋の夕ゑ　松下
嵐強いゑ[illegible]秋の[illegible]　普船
深出を人[illegible]　九十
朝姫ゑ[illegible]ゑ[illegible]蛍の昏　水刀

うち枯の中よりけうと茄子うり　さの一山

柳の末を落すんうやほの月　仙化

はつこおばすまうやなの月　キ角

名乃紙

時雨もつをれるうへく酒のうん　撒士

と未来の白文を生せるれの

時雨くる酔やのこうて村雨　キ角

とる去のくをとやさて一老乃

兄屋さのくをのみ用合せて

家院む津と

こうのをこいとをうしてよ・

此社れ溢ゆりやもしくを　裏油

一時雨うるはてやあの中くぐと　探泉

少ゆくれ陳くたいる傘乃音　嵐蘭

みこうりいさりて事のしをる　彫窠

名川や筏のするまの原　キ角

勝亀を一節ゆをちくゆ　少花

うりうく殿の風を乃雲地下　亀翁

川筋の遠くを曲る柱地うま　岩泉

風ゆ優ゆ日乃　絲（ニ分）　三翁

柏のすを院ひうゆり村時雨　（三分）蘭風

百義仲菴を出て来り

風や襟さくらけるは殊勝の名　牝牛

菖の葉のうつくしさ　翁

気の気を鼻のうしの川こむ私ぬか　春水

思ひ出て聊新なる火燈哉　一澄

嘲しく火燈さ藤入童うな　岩翁

さくらさくら私ぬかて夜の多　如春

目さうりあこ氣まし私ぬの浮世ぬ　子角

新文の花をうめる私ぬか　遠方

炭俵のひとりそあんん釜の際　子角

袴ぬ子のの草履とる新心　子堂

つのあまを行あられしあの塵　仝

人新や霜月はぬ富士乃山　其由

月の畫

竹青く日赤し雪ぬ墨のくま　素堂

笠重し吳天雪

我雪とおのへとうし笠の上　其角

千鳥はなれぬ沖中乃釣　松風

山列東北の方より
ふきとおく見よりて猿を不二の雪　智月
雪うゝ新炭の新しゝ世ゝの門ゝ　詞山
まゝ新なる神楽男の神ゝ　栄雫
出れば蓬色こゝろ枯るゝもの友　野徑
ゝゝゝ子節句ゝゝ夕日ゝゝ　孚先
世中色のゝゝまゝてゝかゝゝ
小形蛾ゝゝゝゝゝゝゝ年の暮　其角
元禄辛未歳内五春日筆納往而堂燈下

武州
青梅